解説

「第1回 21世紀 COE8 大学合同シンポジウム」開催を振り返って

On The Organization of The First 21st Century COEs' Joint Symposium

小 椋 優* *早稲田大学理工学術院総合研究所（理工学研究所）

Yu Ogura* *Advanced research institute for science and engineering, Waseda University

1. はじめに

2005年3月15日、早稲田大学大久保キャンパスにおいて「第1回 21世紀 COE8 大学合同シンポジウム」が開催された。本シンポジウムはタイトル通り、八つの COE 大学拠点[†]が合同で主催し、またその企画、運営、準備まで、主に各拠点を代表する学生によって行われるという、ある意味実験的、挑戦的なシンポジウムであったと思う。筆者はそこで、開催会場の学生代表として、シンポジウム実行委員長を務めさせていただき、多くの貴重な経験を積みさせていただいた。本稿において、どのように本シンポジウムが開催されたか、その当時の随想もふまえて、解説させていただきたい。

2. シンポジウム開催前～21世紀 COE プログラム採択時から開催に至るまで

筆者の所属する早稲田大学が、文部科学省の研究拠点形成費補助金事業の一つである「21世紀 COE プログラム」に採択されたことを知ったのは、博士課程1年次のことであつた。採択はひとえに本学の教授の尽力の賜物であり、当時の筆者、そして博士課程の同僚はほとんど皆、そもそも21世紀 COE プログラムとは何なのか？をまったく理解しておらず、むしろその後、博士課程の学生の奨励として補助金が支出されることを知り、予期していなかった朗報に「棚からぼた餅」と感じていたのが正直なところであろう。

採択後、改めてこの21COEについて調べてみると、このプログラムの主旨は次のように説明されていた。

「我が国の大学が、世界トップレベルの大学と伍して教育および研究活動を行っていくためには、第三者評価に基づく競争原理により競争的環境を一層醸成し、国公私を通じた大学間の競い合いがより活発に行われることが重要です。このプログラムは、我が国の大学に世界最高水準の研究教育拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造

的な人材育成を図るため、重点的な支援を行い、もって、国際競争力のある個性輝く大学づくりを推進することを目的としています。」[1]

要するに、採択されたら大学間で競い合え！という趣旨であろう。しかし当時の筆者、そして同僚達も具体的にどうやって競い合うことが求められているのかについては、まったく頭が及んでいなかった。むしろ、特に意識をせず今まで通り研究を遂行していれば、研究分野が重なる他大学・他機関とおのずと競合するだろう程度の考えで、本プログラムにおいて研究を始めた。

さて、本学におけるプログラム1年次（2003年～）は、拠点形成の基盤造りに力を注いだ年であつた。「人間と RT の共創を目指した分野横断的な研究」と「創造的・実践的な研究者となる博士課程学生の養成」の二つのテーマをプログラムの柱とする本学では、これらを遂行する一環として、COEにおける研究推進のマネジメント自体を（各指導教授の下）学生主体で行うことが求められている。このマネジメントにはいわゆる“研究”の他に、COE活動の拠点整備、備品購入、研究会・シンポジウムの開催等も含まれる。このため助手会を設け、定期的にミーティングを開き、運営にかかわる用務を洗い出し、おのおのの役割分担を行い、プログラムとして遂行すべき研究について議論した。今考えれば、このような実務経験が後のシンポジウム運営に非常に役に立った。

このようにして、助手会を中心とした COE 活動が進められていく中、2年次になってようやく、自らの拠点における研究推進の手法とその成果が、いったいどれほどのものなのか？という疑問が湧いてきた。そして必然的に、「他大学拠点では実際のところどうやっているのか？」という

[†]第1回の主催は以下の8大学拠点

- 慶應義塾大学「知能化から生命化へのシステムデザイン」
- 東京工業大学「先端ロボット開発を核とした創造技術の革新」
- 東京大学「機械システム・イノベーション」
- 東京電機大学「操作能力熟達に適應するメカトロニクス」
- 東北大学「バイオナノテクノロジー基盤未来医工学」
- 名古屋大学「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」
- 広島大学「超速ハイパーヒューマン技術が開く新世界」
- 早稲田大学「超高齢社会における人とロボット技術の共生」

原稿受付 2007年1月30日

キーワード：21COE

*〒169-8555 新宿区大久保 3-4-1

*Shinjuku-ku, Tokyo

話題が持ち上がるが多くなった。

ここまで早稲田大学を例にとって説明させていただいたが、こうした流れはやはりどの拠点でも同じくして起こっていたようだ。21COE プログラムに乗ったつもりが乗せられていたのか、とにかく、このような同時多発的に起こったある種の焦りが、「競うべき相手」をお互いに認識させる結果になったのだと思う。

3. シンポジウム開催決定～合同シンポジウム実行委員会の設立

ところで多くの“きっかけ”がそうであるように、実際のところ本合同シンポジウムの開催のアイデアが生まれたのは、各21COE 採択拠点リーダーの先生方のご交流からである。筆者がこのお話をいただいたのは、確かロボット学会の懇親会会場であり、たまたまグラスを片手にうろうろしていた筆者に、早稲田大学の COE 拠点リーダーである藤江教授から、「やるから、やって！」とお声がかかった。その際にいただいたお話は、機械工学・バイオエンジニアリング等をベースにする COE 拠点が集結したシンポジウムを開催する、ということであった。学内での研究会・シンポジウムの開催ならともかく、各大学拠点間の協力の下に一つのイベントを運営するということは、当時の筆者にはイメージがつかないものであった。

暫く困惑したあげく、自分一人では不可能である、という当たり前の事実気がついた。もとより筆者一人の問題ではなく、また早稲田大学のみの問題ではない。さらに他大学の動向も気になっていた時期であった。そこで、どうせ背伸びして真似事をするのであればと、「参加拠点合同主催」、および各拠点を代表する2～3名の学生から成る「シンポジウム実行委員会」設立の提案をさせていただいた。そして助手会・教授会、そして各拠点からの了承を得ることができた。後に各拠点リーダーの先生方を通じて拠点代表の学生を選出いただき、代表学生の皆様には無理を言って当学にお集まりいただいた。このようにして、集まっていたメンバーを中心として「合同シンポジウム実行委員会」を、半ば強引に設立させていただいた。青天の霹靂であったにもかかわらず、実行委員になっていただいた皆様にはまずここで感謝したい。

4. 合同シンポジウム実行委員会

4.1 委員会の開催

実行委員会は、2004年12月21日および2005年1月20日の2回にわたって早稲田大学にて開かれた。第1回の実行委員会開催までに決定していたことは、開催日時・開催場所の2点のみであった。早稲田大学の助手会にて作成した草案をたたき台として議論を行い、新たにシンポジウム企画書が作成され、また各拠点の役割分担が決定された。

第2回の実行委員会においては、進捗状況の確認とシンポジウム運営にかかわる詳細な打ち合わせが行われた。

議論の場にて非常に印象深かったことは、各大学拠点ごとの性格の違いが拠点代表の実行委員にも表れるように感じたことである。「とりあえずやってから考えよう」という大学に対して、「まずテーマを設定するべきだ」とする大学、実務的な事柄を優先と考える大学と、シンポジウムの大枠の共通認識を図る大学、発言が早い大学と最後まで慎重な姿勢を崩さない大学。どこがどことの明言は避けるが、これらは筆者の抱いていた大学の“カラー”から遠く離れないものであったと思う。意見のぶつかり合いから新しいアイデアが生まれ、シンポジウムのプログラムが充実する一方、現実的なタイムリミットを考慮して、効率的な運営方法が模索されていった。このような会議の運営自体、筆者にとっても初めてであり、議事の進行は難航したが、非常に新鮮で、良い刺激を受けた。

4.2 シンポジウム概要

実行委員会にて決定されたシンポジウムのコンセプトは、

- 学校・分野の枠を超え
- お互いの研究を知る勉強会的な性質で
- 同世代学生の交流を深めることのできる
- 学生による学生のための（シンポジウム）

であった。これらを実現するため、シンポジウムのプログラムは、

- 各拠点内容紹介のプレゼンテーション（15分×8拠点）
- 招待講演（50分×2名）
- ポスターセッション（1時間×2回、各拠点5名×8大学）

をメインとする構成に決定された。他大学の学生同士の交流・ディスカッションの敷居を下げるため、ポスターセッションをシンポジウムの後半に設定した。これは、会場が盛り上がった状態で行われることを期待したためである。

4.3 各拠点の役割

合同主催ということで、運営にかかわる庶務もまた、各拠点で分担を行った。

4.3.1 プログラム・特別講演企画：慶應義塾大学

シンポジウムのプログラム編成と特別講演企画および講演者の招聘を担当いただいた。特別講演では、東京女子医科大学学長の高倉公朋教授、慶應義塾大学の狼嘉彰先生のお二方に講演いただけることとなった。

4.3.2 会計：東京工業大学

予算の組み立て、伝票の処理など会計処理全般を担当いただいた。本シンポジウムでは予算もまた調整の上、各拠点で負担することとしていた。各大学での伝票処理方法の相違のある中、また年度末の会計締め切りの迫る中、非常に困難な仕事であったと思う。

4.3.3 資料作成 (ポスター、リーフレット、成果報告書): 東京大学

ポスター (図 1), リーフレットの原稿作成, また印刷業者の選定・手配を担当いただいた。また, 本シンポジウムにおける研究発表内容を含む成果報告書 [2] を作成いただいた。

4.3.4 広報: 東京電機大学

各種学会への協賛願い, ポスター・リーフレットの配布, その他学会メーリングリスト, マスコミ等を通じた広報全般を担当いただいた。

4.3.5 メーリングリスト, ホームページ: 広島大学

実行委員会連絡用メーリングリスト, ファイルサーバの設立およびその管理, またホームページの製作を担当いただいた。

4.3.6 会場設営・懇親会: 早稲田大学

開催会場として, 看板, 受付, 休憩所の設置・撤去, PC・AV 機器, 照明, マイクなどの設備等, 会場の設営を行った。また懇親会についても会場, 料理の手配, および司会進行を担当した。

4.3.7 司会運営: 東北大学

シンポジウムの司会進行, また名札・アンケート用紙の作成と準備等, 会場担当で覆いきれなかった部分を担当

いただいた。

4.3.8 議事録・内部報告書作成: 名古屋大学

第 2 回の開催を目指した 8 大学が共有できる今後の資料として, 本実行委員会にて行われた実務全般・会議資料などを編集していただいた。

5. シンポジウム開催結果報告

不安が拭いきれない中, 開催を迎えた本シンポジウムは, 終わってみれば盛況で幕を納めることができた。参加者は予想を大きく上回る 200 人強を迎え, 終始, 会場の様々な場所でディスカッションが行われていた。午前に行われた各拠点内容紹介においては, 参加者がそれぞれお互いの胸の内を探り合っている感じであったが, 午後になり, 非常に刺激的であった招待講演 (図 2) によって会場の熱も上がり, その後のポスターセッション (図 3) では 120 分間熱気が冷めなかった。目標としていた「学校」そして「研究」の敷居を下げることはできたのではないかと考えている。特に交流を深めるという点で, 普段は機会のない他大学・他分野の学生とのディスカッションが盛んに行われていた。それどころか, 参加いただいた教授の方々と学生が意見を交わす場も多く見られた。多くの方に懇親会までお

図 1 シンポジウムポスター

図 2 講演会場

図 3 ポスターセッション

付き合いただき、本シンポジウム運営、今後の工学のあり方について、様々なご意見をいただきました。

6. お わ り に

本シンポジウムは、学生による運営手法の確立、異分野・多拠点との交流を促進という意味で、非常に意義深いものであったと思われる。COE プログラムの目指す「人材育成」および「拠点間での切磋琢磨」に多少なりとも寄与できたのではないかと考えている。本シンポジウムによって、筆者は非常に良い経験をさせていただき、様々な意味で視野を広げることができた。中でも、同世代の研究者と多く交流を持つきっかけとなり、現在の交流に繋がっていることは、今後の代え難い資産となるだろう。

本シンポジウムは、次回の期待を込めて初めから「第1回」というタイトルを付けさせていただいた。第2回は名古屋大学で開催され、盛況であったと聞き及んでいる。今後も引き続き、このような学生主体のイベントが行われることを期待している。

謝 辞 本シンポジウム開催に当たって、このような機会と暖かいご支援をいただくことのできた各拠点の先生方に感謝いたします。とりわけ、吉田和夫 教授、廣瀬茂男 教授、笠木伸英 教授、古田勝久 教授、佐藤正明 教授、山口隆美 教授、三矢保永 教授、生田幸士 教授、金子真 教授、高西淳夫 教授、藤江正克 教授に厚く御礼申し上げます。ま

た、協賛・ご協力いただけた各学会に感謝の意を表します。そして、当方に至らぬところが多々あった中、それらを埋めて余りあるご活躍をいただいた実行委員会の皆様、高橋正樹 様、藤井飛光 様、太田祐介 様、本村和寛 様、多田隈建二郎 様、杵淵郁也 様、三輪潤一 様、五十嵐洋 様、小峯孝吉 様、大沼健太郎 様、飯田浩司 様、川合祐輔 様、福井智宏 様、山田章 様、梶間日出輝 様、尾形晋 様、川原知洋 様、岡本 勝 様、古挽 彰 様、そして早稲田大学 COE 助手会の皆様に深く感謝いたします。

参 考 文 献

- [1] 日本学術振興会「21 世紀 COE プログラム」ホームページ：<http://www.jsps.go.jp/j-21coe/>
- [2] 第1回 21 世紀 COE8 大学拠点合同シンポジウム～異分野交流による新領域の創成を目指して～成果報告書（同実行委員会 編），2005。

小 椋 優 (Yu Ogura)

2001 年早稲田大学理工学部機械工学科卒業後、2006 年早稲田大学理工学研究科生命理工学専攻博士課程修了、博士（工学）。博士課程在籍時に日本学術振興会特別研究員（21COE）、第1回 21 世紀 COE8 大学合同シンポジウム実行委員長。2006 年早稲田大学理工学術院総合研究所（理工学研究所）客員研究助手。主に 2 足ヒューマノイドロボット、患者シミュレータ、オーラルリハビリテーションロボットに関する研究に従事。2006 年機械学会論文賞受賞。

（日本ロボット学会正会員）